



TITLE:

ニホンザルにおけるリーダーシップ行動の群れ間の比較(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

乗越, 皓司

CITATION:

乗越, 皓司. ニホンザルにおけるリーダーシップ行動の群れ間の比較(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1985, 15: 73-73

ISSUE DATE:

1985-10-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163496>

RIGHT:

霊長類歩行時の足底圧分布に関する研究

真家 和生・近藤 四郎（大妻女大・人間生活科学研）

霊長類の歩行時足底圧の研究の一環として、ビデオスコープを用いて足底接地部位の観察を行い、ビデオテープレコーダーに記録して接地時間の解析を試みた。

実験に用いたサルは、アカゲザル（*Macaca mulatta*）であり、霊長類研究所形態基礎部門の実験用歩行路を使用して実験を行った。歩行路は幅約50cm、長さ約390cmで、一端からサルを追い、歩行路中央に設置したビデオスコープで観察を行った。

比較的ゆっくりとした歩行時の観察から、前肢の足底接地部位は、いわゆる蹠行ではなく、中手骨々頭部より指の末端に至るまでを4指を平行にして付け、ビデオスコープ面上がガラスであるため脱糞などの際は滑らぬように指先に力を入れたような形で、中手骨々頭部と各指の末節部を接地する状態となる。また、平行にした4指の向きは、ゆっくりとした状態での歩行時にはほぼ進行方向に平行であるが、状況に応じて、進行方向に対して約60度程外転させて接地する場合もみられた。

後肢に関しては、記録が不十分で例数が少なく定かではないが、比較的ゆっくりとした歩行時には、踵骨部および中足骨々頭部から各指の末端までを接地し、踵骨部はすぐに離地させる。前肢・後肢とも左右差はみられなかった。

これらの結果から、前肢・後肢の接地部位の相似性および中手骨・中足骨々頭部の接地圧の重要性などが指摘された。

ニホンザルにおけるリーダーシップ行動の群れ間の比較

乗越 皓司（上智大・理工）

ニホンザルにおけるリーダーシップ行動の群れ間の違いが餌づけ集団である嵐山AおよびB群と純野生群の木曽S群において比較・分析された。

1972年に米国テキサス州に集団移住した嵐山A群では、1983年2月～3月に調査された資料が比較のため利用された。この群れのαオスは、調査当時前リーダー死亡後3カ月過ぎ、13才の壮年個

体であった。嵐山B群のαオス、K・63は、前リーダー、M・59の失踪後4年過ぎ、22才の老年個体であり、この間に一度数カ月間姿を消した。この2つの群れは、200頭以上の大個体数を擁し、全個体識別下にある。一方、木曽S群は、100頭前後であるが、正確な個体識別はまだできていない。調査は、嵐山B群では、1985年2月～3月の20日間、木曽S群では、春若葉の時期である5月と秋の柿の実の時期である12月の延15日間行われた。結果は次の通りである。

嵐山A群のαオスは、とりしまり行動や群れ防衛・警戒行動を非常に積極的に行ったが、彼の行う群れ遊牧の誘導に対しては他の個体があまり多く従わなかった。一方、嵐山B群では、上に述べたリーダーの役割をほとんど行わなかった。木曽では、人家近くの柿を食べに来るサルに対して強煙火システム等のいわゆる“猿害”防止活動が積極的に行われている。これに対して、サルは敏感に群れの警戒をし、人間との強い緊張関係にある。調査期間中に観察されたこれらの警戒反応から、リーダーシップ行動を行う個体はαオスの他数頭の中心部オスであり、メスや子供たちは近くににいるそれらのオスにつき従っていた。

リーダーシップ行動の群れ間のちがいは、年令や個体の履歴など多くの要因がかかわっているが、嵐山B群のように、リーダーシップ行動が少なくても、群れ内の統制が十分にとれており、争いが特に多くなることはなかった。

3. 研究会

ニホンザルの種の実態と保存方法の研究

3年継続した共同研究課題Ⅰの最終年に当たり、これまでの成果を総括し、将来への展望を試みるため、12月18日、14日の両日霊長類研究所において研究会を開催した。来会者は所内を含め約25名、会の次第・発表者・題目は以下のとおりである。

第1部 ニホンザルの現況ならびにその問題点 A. 野猿公苑について

座長 和田一雄（京大・霊長研）

1. 嵐山における野猿公苑と環境問題